

敦煌禪宗文獻分類目錄

田中良昭
程 正

Ⅲ 注抄・偽經論類(1)

〈敦煌寫本シリーズ (寫真版)〉

・『浙藏敦煌文獻』(杭州、浙江教育出版社,2000) →『浙藏敦煌』

[心經注疏類]

1、注般若波羅蜜多心經 (淨覺)

① S4556 ② 敦煌市博物館所藏 77 (任子宜氏舊藏本)

[テキストの翻刻・校定]

② 呂澂「敦煌寫本唐釋淨覺「注」『般若波羅蜜多心經』(附說明)」(『現代佛學』1961-4) —㊦→『中國敦煌學百年文庫 宗教卷(四)』(蘭州,甘肅文化出版社,1999,pp.81-87)

①② 柳田聖山「資料七 注般若波羅蜜多心經 淨覺」(『柳田史書』,pp.594-624) →〈柳田〉6 (pp.594-624) —㊦

①② 楊曾文「淨覺及其『注』般若波羅蜜多心經」(附其校本)」(『中華佛學學報』6,1993,pp.237-261)

①②㊦㊧ 方廣錫「注疏一一 注般若波羅蜜多心經 (唐) 淨覺撰」(同氏編纂『般若心經譯注集成』(佛學名著叢刊)上海,上海古籍出版社,1994,pp.336-355) →同 (上海,上海古籍出版社,2011)

①②㊦㊧ 鄧文寬,榮新江録校『敦博本禪籍録校』(敦煌文獻分類録校叢刊)(南京,江蘇古籍出版社,1998,pp.433-488)

②『甘肅敦煌』第6册 (pp.275-278) (影印)

②「五『注般若波羅蜜多心經』一卷」柳田聖山、椎名宏雄編『禪學典籍叢刊 別卷』(臨川書店,2001,pp.135-143) (影印)

[著書・論文]

向達「西征小記」(『國學季刊』7-1,1950) →同氏『唐代長安與西域文明』(生

活・讀書・新知三聯書店,1957)→同〈二十世紀中國史學名著〉(河北,河北教育出版社 2001,pp.328-364)

竺沙雅章「淨覺夾注『般若波羅蜜多心經』について」(『佛教史學』7-3,1958, pp.196-199)

柳田聖山「『菩提達摩南宗定是非論』について」(『柳田史書』,pp.103-117)→〈柳田〉6 (pp.103-117)

岡部和雄「淨覺の『注般若波羅蜜多心經』」(『敦煌佛典と禪』,pp.338-339)

田中良昭「北宗禪と南宗禪—神會の北宗批判—」(塩入良道・金岡秀友編『佛教思想史4 佛教内部における對論—中國・チベット—』平樂寺書店,1981,pp.85-113)→「初期禪宗における對論」『田中敦煌』(pp.479-500)

楊曾文「淨覺及其『注』般若波羅蜜多心經」(附其校本) (『中華佛學學報』6,1993,pp.237-261)

方廣錫「前言」(同氏編纂『般若心經譯注集成』〈佛學名著叢刊〉上海,上海古籍出版社,1994,pp.22-23)→同(上海,上海古籍出版社,2011)

鄧文寬,榮新江「前言」(同兩氏録校『敦博本禪籍録校』〈敦煌文獻分類録校叢刊〉南京,江蘇古籍出版社,1998,pp.1-41)

椎名宏雄「五『注般若波羅蜜多心經』一卷」(柳田聖山、椎名宏雄編『禪學典籍叢刊 別卷』解題,臨川書店,2001,pp.438-439)

程正「淨覺—その人と思想—」(『駒大禪研年報』13・14 合併號,2002,pp.45-62)

千田たくま「『楞伽師資記』の作者淨覺について」(『竹貫元勝博士還暦記念論文集:禪とその周邊學の研究』永田文昌堂,2005,pp.205-215)

程正「淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』の譯注研究」(『駒大禪研年報』17,2006, pp.191-216)

程正「『般若心經』と初期禪宗—禪僧による注疏を中心にして」(『駒大佛教論集』37,2006,pp.255-272)

千田たくま「ふたりの淨覺」(『花園大學國際禪學研究所論叢』2,2007,pp.43-66)

〔略記〕

本書は、敦煌禪宗文獻の中で禪僧による『般若波羅蜜多心經』(以下、『心經』)の注釋書として最初に發見されたものである。その冒頭にある李知非なる人物の手によった序文から、本書が727年に成立したことが知られ、現在知られている唐代に成立した禪僧による『心經』注釋の中では、成立年代がはっきりしている唯一のものである。また、その著者の淨覺は、北宗の祖師であ

る大通神秀、嵩山慧安、安州玄曠の3人に師事したものであり、北宗の燈史である『楞伽師資記』の撰者としても名高い人物であるからして、本書は北宗禪の禪思想や初期禪宗における『心經』に對する受容などを検討する上で、極めて重要な文獻である。

本書の存在を最初に紹介したのは、向達氏による「西征小記」（『國學季刊』7-1、1950）と題する論文の發表であるが、この論文は後に改訂され、同氏の『唐代長安與西域文明』（生活・讀書・新知三聯書店、1957）に収録された。向氏によれば、彼が1943年から1944年にわたって敦煌に赴き、敦煌の名士であった任子宜氏の所藏する本書の他に、『菩提達摩南宗定是非論』（以下、『定是非論』）、『南陽和上頓教解脫禪門直了性壇語』（以下、『壇語』）、『六祖壇經』などの禪宗文獻を連寫した敦煌文獻を發見したという。後に明らかになったことであるが、向氏はその際に本書を手寫したのである。（以下、向達氏手抄本）その經緯については、後述する『柳田史書』の中で柳田聖山氏が次のように説明されている。すなわち、それは「後にリーベンタール氏が北平圖書館の寫經室で向達氏の手抄本を見て自から寫し所持していたものを、インドのデリーで春日井眞也氏が借りて寫し、昭和三十五年（1960）に至って、花園大學學長山田無文老師の還曆記念に贈られたもの」であるという。

その一方、1954年に竺沙雅章氏が、京都大學人文科學研究所に所藏されたスタイン蒐集敦煌資料のマイクロフィルムの中から新たに本書のテキスト①を發見し、それを「淨覺夾注『般若波羅蜜多心經』について」（『佛教史學』7-3、1958）と題して、學會に報告された。なお、①の形態などについては、竺沙氏が次のように紹介されている。すなわち、「本文は經文を大字にして、各語句下に小字の注文を雙行に書き、併せて八十九行ある。首題・尾題共にあり、首部の前に序文（首缺）が二十六行残っている。長さは8フィート、やや硬質の紙であると言う」の如くである。

ところで、1961年に呂澂氏が「敦煌寫本唐釋淨覺（注）般若波羅密多心經（附説明）」（『現代佛學』1961-4）と題する論文を發表され、本書の全文が初めて世に知られるようになった。呂氏は竺沙氏の研究成果を知らず、したがって㊸のすべてが向達氏手抄本によったものとみられる。その後、柳田聖山氏による『柳田史書』が公刊され、本書がその「附録 資料の校注」の資料七として収録されている。㊸の存在を知らなかった柳田氏は、前述の經緯で向達氏手抄本をさらに筆寫したものを入手し、①を底本に、向達氏手抄本の筆寫本を校本として新たなテキストを作成し、さらに語注も付け加えている。

一方、向達氏手抄本のオリジナルテキストとなる②は、その後長い間その行方が知られないままであった。ところが、1986年に榮恩奇氏が整理した「敦煌縣博物館藏敦煌遺書目録」(『敦煌吐魯番研究』3、1986)と題する目録が刊行され、これによって②が敦煌県博物館(現、敦煌市博物館)に收藏されていることがようやく判明したのである。その②は『定是非論』(首缺)、『壇語』、『南宗定邪正五更轉』、『六祖壇經』、本書の順に5種の禪宗文獻を連寫したものである。(以下、敦博本)この寫本全體の形態などについては、本目録の『六祖壇經』などの項目で詳述しており、それに譲りたい。その後、當時の中國社會科學院の研究者であった楊曾文氏が、この②の寫眞の提供を受けて、②を底本とし、①と㊟とを校合して新たなテキストの校訂を試み、その成果を「淨覺及其『注』般若波羅蜜多心經」(附其校本)、『中華佛學學報』6、1993)と題して發表された。そして、その翌年の1994年に、楊氏と同様に當時の中國社會科學院に所屬していた方廣錕氏が、『般若心經譯注集成』(佛學名著叢刊)(上海古籍出版社、1994)を出版され、その中で方氏は、②を底本に、①㊟㊟の3種を校本としてテキストの校訂を行った。さらに、鄧文寬、榮新江の兩氏が、その著『敦博本禪籍録校』(敦煌文獻分類録校叢刊)(江蘇古籍出版社、1998)において、本書を含む5種の禪宗文獻の連寫本である②の全文を連寫順に校訂し、②を底本、①を校本、㊟㊟を參校本としてそれぞれ用いている。こうした先學の研究成果を踏まえつつ、㊟をベースに本書の和譯と語注を試みたものに、程正氏の「淨覺撰『注般若波羅蜜多心經』の譯注研究」(『駒大禪研年報』17、2006)と題する論文がある。

また、敦博本②の影印については、まず中國においては1999年に出版されたシリーズ『甘肅敦煌』の第6冊に収録され、そして日本においては、2001年に出版された柳田聖山、椎名宏雄の兩氏共編の『禪學典籍叢刊 別卷』(臨川書店、2001)に収録され、大いに學界の注目を集めたのである。

ところで、本書の著者である淨覺は、同じく敦煌から發見された北宗禪の燈史である『楞伽師資記』の著者としてその名が廣く知られている。淨覺については、まず柳田聖山氏が『柳田史書』で彼を唐の中宗皇帝の皇后であった韋氏の實弟と推定された。一方、楊曾文氏が「淨覺及其『注』般若波羅蜜多心經」(附其校本)、『中華佛學學報』6、1993)と題する論文を發表し、淨覺の家系や神秀、慧安、玄曠に師事したことなどを考察した上で、本書の内容を分析した結果、淨覺は般若の空思想を據り所にし、一切の觀念や言語などを徹底的に否定して、「空無所得」の境地を最高のものとしつつも、「不二」

の法門を根據に、「生死性即涅槃」という極めて南宗禪に近い思想を持っていることを指摘された。その後、程正氏が「淨覺—その人と思想—」（『駒大禪研年報』13・14 合併號、2002）と題する論文を發表し、その前半部分においては、『舊唐書』などのいわゆる中國の正史の書を用いて、淨覺と同時代の韋氏一族を中心に考察し、淨覺が韋皇后の實弟ではないことを明らかにし、後半部分においては、淨覺の著した本書を基本資料として、『楞伽師資記』、『四卷楞伽』、『大般涅槃經』などの資料を援用しつつ、淨覺にみられる「一乘道」の思想と淨覺の佛性觀の2つのテーマに絞って、その思想的關連性を解明することに努めたのである。それに對し、千田たくま氏の『『楞伽師資記』の作者淨覺について』（『竹貫元勝博士還曆記念論文集：禪とその周邊學の研究』永田文昌堂、2005）と「ふたりの淨覺」（『花園大學國際禪學研究所論叢』2,2007）と題する2篇の論文では、淨覺撰『楞伽師資記』、本書、王維撰『大唐大安國寺故大德淨覺師並序』などの從來知られている資料を改めて検討した上で、新たに『大慈禪師墓誌銘並序』を紹介し、その主人公である大慈禪師を本書の著者の淨覺と同一人物であるとしたのである。

また、「略記」の冒頭で觸れたように、本書には李知非と名乗る人物の手によった序文が附されている。李知非については、この序文に記された「皇四從伯中散大夫行金州長史」という肩書き以外は知るよしもないが、彼の序文の内容が、本書の本文と同様に從來研究者の注目を集めてきたのである。すなわち、まず、柳田聖山氏が「『菩提達摩南宗定是非論』について」（『柳田史書』）と題する章節で、李知非序にある「南宗」という呼稱や玄曠より本書の著者である淨覺に袈裟などが傳授されたという内容について、「神會が、滑臺の宗論で、口を大にして主張する菩提達摩の南宗と、傳衣付法の原型が、すでに玄曠と淨覺の間に成立していたことを指摘すれば充分である」と指摘されている。これを受けて、田中良昭氏が「北宗禪と南宗禪—神會の北宗批判—」（塩入良道・金岡秀友編『佛教思想史4 佛教内部における對論—中國・チベット—』平樂寺書店、1981）と題する論文において、李知非序について「今日一般に北宗禪の名で呼ばれているものが、まさに「南宗」そのものであったのであり、その代表的燈史の書である『楞伽師資記』も、それを編した淨覺や、淨覺と關係の深い李知非にとっては、「南宗の傳燈史書」という自覺に立っていたことが窺われるのである」と指摘されている。こうした一連の研究によって明らかにされたように、本書に附された李知非の序文が言及した楞伽の傳燈、袈裟の傳授（傳衣）、南宗の呼稱などは、いずれも初期禪宗の歴史を語る

際に、缺かすことのできない重要なキーワードであったのである。

2、註般若心經 (江南禪師智融)

① P2903 ② P3131V ③ BD6146 (薑 46、北 4475) ④ Д x 149 (M322)

[テキストの翻刻・校定]

②③柳田聖山「江南智融禪師注・般若波羅蜜多心經」(『花信風』2,1976,pp.130-134)
—柳→〈柳田〉1 (pp.350-358)

②③方廣錫「注疏一二 般若波羅蜜多心經注 (唐) 智融撰」(同氏編纂『般若心經譯注集成』〈佛學名著叢刊〉上海,上海古籍出版社,1994,pp.362-376)
→同(上海,上海古籍出版社,2011)

④程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」(『禪學研究』83,2005,pp.39-40)

柳田中良昭「江南禪師智融註『般若波羅蜜多心經』の譯注」(『松ヶ岡文庫研究年報』19,2005,pp.35-51)

[著書・論文]

柳田聖山「江南智融禪師注・般若波羅蜜多心經」(『花信風』2,1976,pp.130-134)
→〈柳田〉1 (pp.350-358)

岡部和雄「智融註の『般若波羅蜜多心經』」(『敦煌佛典と禪』,pp.339-340)

福井文雅「『般若心經』注の敦煌新出寫本二點一文沼注と智融注」(『東方學論集』〈東方學會創立四十周年記念〉1987)→同氏「敦煌新出抄本『般若心經』文沼注與智融注研究」(『中國域外漢籍國際學術會議議事録』(臺北,國學文獻館,1987)(中國語譯)→同氏『般若心經の總合的研究—歴史・社會・資料—』(春秋社2000,pp.429-439)

方廣錫「注疏一二 般若波羅蜜多心經注 (唐) 智融撰」(同氏編纂『般若心經譯注集成』〈佛學名著叢刊〉上海,上海古籍出版社,1994,pp.23-24)→同(上海,上海古籍出版社,2011)

程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」(『禪學研究』83,2005,pp.39-40)

程正「『般若心經智融注』の著者について」(『宗學研究』47,2005,pp.251-256)

田中良昭「江南禪師智融註『般若波羅蜜多心經』の譯注」(『松ヶ岡文庫研究年報』19,2005,pp.35-51)

程正「『般若心經』と初期禪宗一禪僧による注疏を中心にして」（『駒大佛教論集』37,2006,pp.255-272）

〔略記〕

本書は、敦煌文獻にしか存在しない禪僧による『心經』の注釋書であり、同じく敦煌文獻から發見された智誥、淨覺の『心經注』とあわせて柳田聖山氏によって「初期禪宗の新しい心經三註」と位置づけられた貴重な『心經』の注釋書である。

本書のテキストについては、まず柳田聖山氏が「江南智融禪師注・般若波羅蜜多心經」（『花信風』2,1976）と題する論文を發表し、その紹介によってペリオ本の②と北京本の③の存在を明らかにされた。その後、福井文雅氏が「『般若心經』注の敦煌新出寫本二點一文沼注と智融注」（『東方學論集』〈東方學會創立四十周年記念〉1987）と題する論文で、また方廣鋳氏がその著『般若心經譯注集成』〈佛學名著叢刊〉上海,上海古籍出版社,1994→2011）において、それぞれペリオ本の①にある首缺の六人の注釋からなる『心經注』のうち、「道」という人物に歸せられる内容が、本書と完全に一致していることを指摘されたのである。さらに、2005年に程正氏が「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」（『禪學研究』83）と題する論文を發表し、俄藏敦煌文獻の中から本書の斷簡である④を發見し、それを考察した結果、この④はもともと北京本③と同一寫本の別の部分であることを突き止めたのである。こうして本書のテキストは、形態の異なる①を含めて都合4種が發見されたのである。このうち、ペリオ本の②は完本であり、北京本の③は首缺であって、その缺けた内容の一部がロシア本の④であるということである。こうした先行研究を踏まえて、㊦に基づいてその和譯と語注を試みたのが、田中良昭氏の發表した「江南禪師智融註『般若波羅蜜多心經』の譯注」（『松ヶ岡文庫研究年報』19,2005）と題する論文である。

一方、「江南禪師智融註、義和寺僧」と記される著者については、まず柳田氏が前掲論文において「江南にいた、一人の無名の初期禪宗の學者」と推測し、また岡部和雄氏は「智融註の『般若波羅蜜多心經』」（『敦煌佛典と禪』）と題する章節で、本書の序文にある「立本少好斯文、研精日久」という表現から、「立本」がその諱ではないかと指摘された。これに對して程正氏は、「『般若心經智融注』の著者について」（『宗學研究』47,2005）と題する論文の中で、新たに知られた許登撰『潤州上元県福興寺碑』（770年建立、『全唐文新編』卷

441) などの資料によって、智融は、762年から770年にかけて、潤州の福興寺にて活躍していた牛頭宗の六祖慧忠の弟子に当たる道融と同一人物である可能性が高いことを指摘し、さらにその所屬とされる義和寺については、恐らく潤州の句容県にあった寺であろう、と推定したのである。

3、般若心經疏 (資州詵禪師)

① S839 ② S7821 ③ S8351 ④ P2178 ⑤ P3229V ⑥ P4940 ⑦ BD3652 (爲 52、北 4489) ⑧ BD4904 (闕9、北 4491) ⑨ BD9110 (陶 31) ⑩ BD9222 ⑪ 卍 x 290 ⑫ 卍 x 385 ⑬ 卍 x 1183 ⑭ 卍 x 5583V ⑮ 卍 x 6148 ⑯ 卍 x 6149

[テキストの翻刻・校定]

①④⑥⑦⑧柳田聖山「『資州詵禪師撰、般若心經疏』考」(『山田無文老師古稀記念集 花さまざま』春秋社,1972,pp.145-177)→①(柳田)1(pp.315-349)

①②④⑤⑥⑦⑧方廣錫「注疏四 般若波羅蜜多心經疏 (唐) 智詵撰」(同氏編纂『般若心經譯注集成』〈佛學名著叢刊〉上海古籍出版社,1994,pp.239-289)→同(上海,上海古籍出版社,2011)

①①②③程正「智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究(2)」(『駒大佛教紀要』65,2007,pp.139-157)

①①②③程正「智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究(3)」(『駒大佛教紀要』66,2008,pp.269-297)

[著書・論文]

柳田聖山「『資州詵禪師撰、般若心經疏』考」(『山田無文老師古稀記念集 花さまざま』春秋社,1972,pp.145-177)→①(柳田)1(pp.315-349)

椎名宏雄「初期禪宗の『心經』注疏」(『宗教研究』47-3,1974,pp.146-148)

岡部和雄「智詵の『般若波羅蜜多心經疏』」(『敦煌佛典と禪』,pp.337-338)

福井文雅「『般若心經』慧淨疏と智詵疏の敦煌寫本照合」(『早稲田大學大學院文學研究科紀要』31,1985,pp.29-37)→同氏『般若心經の歴史的研究』(春秋社,1987,pp.363-428)→同氏『般若心經の總合的研究—歴史・社會・資料—』(春秋社 2000,pp.363-428)

伊吹敦「般若心經慧淨疏の改變にみる北宗思想の展開」(『佛教學』32,1992,pp.41-67)

程正「智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究(1)」（『駒大大學院年報』39, 2006, pp.85-96）

程正「『般若心經』と初期禪宗—禪僧による注疏を中心にして」（『駒大佛教論集』37, 2006, pp.255-272）

程正「智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究(2)」（『駒大佛教紀要』65, 2007, pp.139-157）

程正「智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究(3)」（『駒大佛教紀要』66, 2008, pp.269-297）

程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について(二)」（『駒大佛教論集』39, 2008, pp.387-391）

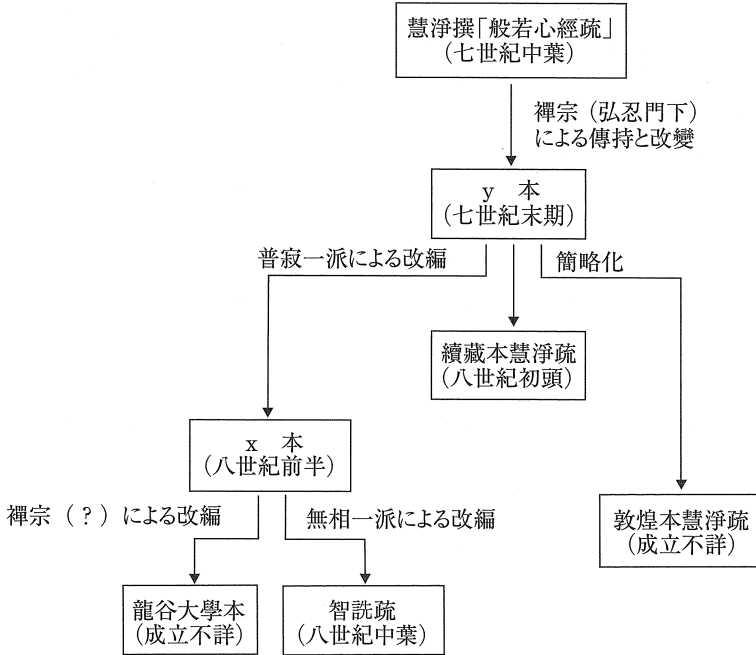
〔略記〕

本書は、兩京（長安、洛陽）と嶺南（現、廣東省）をそれぞれ根據地とした北宗と南宗とは異なり、初期禪宗の第三極として四川の地を中心に教線を張った淨衆・保唐宗の祖と仰がれた智詵によるものとされた『心經』の注釋書である。智詵は、北宗の神秀、南宗の慧能と同様に五祖弘忍の十大弟子の一人に數えられる。同じく敦煌文獻の中から發見された淨衆・保唐宗の燈史である『歷代法寶記』の敘述によれば、智詵には『虚融觀』3卷、『縁起』1卷、『般若心疏』1卷があったというが、『虚融觀』と『縁起』はいずれも現存せず、『般若心疏』1卷こそがまさしく敦煌文獻より發見された本書とみられている。つまり、本書は現存する智詵の唯一の著述であり、彼の思想を語るにあたっては缺かすことのできない重要な文獻である。また本書の正確な成立年代については特定できていないが、智詵（609-702）の生卒年からすれば、たとえ本書を彼の最晩年のものだとしても、禪僧の手になる現存の『心經』の注釋書の中では、本書は最古のものなのである。

本書についていち早く注目し、取り上げたのが、柳田聖山氏の「『資州詵禪師撰・般若心經疏』考」（『山田無文老師古稀記念集 花さまざま』春秋社, 1972）と題する論文である。柳田氏は、本書と紀國寺慧淨撰『般若波羅蜜多心經疏』（以下、『慧淨疏』）及び龍谷大學所藏『般若波羅蜜多心經疏』（以下、龍大本『心經疏』）との類似性を指摘し、それらの文獻の相互の關連性などについての問題を提起し、さらに本書のテキストとして⑥、⑦、④、⑧、①の5種を紹介された。それによれば、④は「卷首の序文と此に續く經典の本文「觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時」についての注疏の一部を抜きだしただけの、わ

ずか一〇行ばかりの斷片」であり、⑥は④と同じ「題號と撰號を有する上に、序文に續く本文約三四行におよんでいて、字體は極めて正確」であり、⑦は「題號と撰號をともに缺くにかかわらず、右のペリオ本第四九四〇號が、本文の注に入るに先立って、全體の段落を九門に分つ部分にはじまって、約二〇行ばかり共通したのち、更に此につづく本文約三八〇行と最後の尾題を有する點で、最も完全なテキスト」であり、⑧は「經典の本文でいえば、「舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減」の部分に對する注疏の斷片で、前後約二〇行にすぎないけれども、字體はすこぶるペリオ本第四九四〇號に似ている。あるいは、その一部かもしれない」とし、①は「經典末尾の神呪の部分の注疏で、すべて約三〇行ばかりの斷片であるが、「般若多心經疏一卷」という尾題を有し、最後は明確に擱筆している」という。そして柳田氏は、最初の2種の⑥⑦を底本に、後の3種の④⑧①を校本として、關連性のある『慧淨疏』の續藏本、S5850、北崑12の3種と龍大本『心經疏』の計4種の文獻を參考に用いて、テキストの校合をされた。これを受けて福井文雅氏は、「『般若心經』慧淨疏と智詵疏の敦煌寫本照合」(『早稻田大學大學院文學研究科紀要』31, 1985)と題する論文を發表し、その中でS554をA本とし、續藏本をB本として『慧淨疏』のテキストの校合を行った上で、龍大本『心經疏』には觸れないものの、『慧淨疏』と本書との前後關係についても考察を加え、『慧淨疏』が本書に先行することを論じられた。

こうした研究成果を踏まえ、伊吹敦氏が「般若心經慧淨疏の改變にみる北宗思想の展開」(『佛教學』32, 1992)と題する論文を發表された。伊吹氏は、禪思想史の立場に立脚して『慧淨疏』、『智詵疏』、龍大本『心經疏』の三者に見られるテキストの異同を分析されたのである。すなわち伊吹氏は、あらかじめ慧淨撰『心經疏』(7世紀中葉)1本があったと想定し、それに禪宗(弘忍門下)による改變がなされ、傳持されて7世紀末にy本が成立したとした。さらにこのy本が、後の敦煌本『慧淨疏』、本書、龍大本『心經疏』のすべてに共通する祖本となったもので、そこから普寂一派の改編によってx本が8世紀前半に成立し、さらにこのx本から無相一派による本書(8世紀中葉)と禪宗による龍大本『心經疏』(成立不詳)が派生したとし、またy本から8世紀初頭に續藏本『慧淨疏』、簡略化された敦煌本『慧淨疏』(成立不詳)の2種が派生したと推論されている。



伊吹敦「般若心經慧淨疏の改變にみる北宗思想の展開」(『佛教學』32, 1992, p.65) より轉載

また伊吹氏は、本書の特徴として、ほかにも次の4点を挙げている。

- 1、きびしい現實認識と往生思想
- 2、「靈覺獨存」の思想の出現
- 3、『維摩經』「不思議品」の融即思想の附加
- 4、『中論』の引用

その後、程正氏が「智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究(1)」(『駒大大学院年報』39, 2006)と題する論文を發表した。程氏は、伊吹氏の『慧淨疏』などの3種のテキストに共通した祖本があったことや、龍大本『心經疏』が北宗の人びとの手によって改變されたものであるとする結論には賛成したものの、敦煌本『慧淨疏』が、y本という禪宗(弘忍門下)による祖本を改變したテキストから簡略化されたものであるとする結論に對し、「よほどの事情

が無い限り、佛教文獻の流布の過程においては、一般的にテキストが増廣される傾向にあると考えられる」として異議を唱えつつ、「禪宗文獻の中でも、『六相壇經』の内容が時代とともに變遷し増廣されていったのは、その好例である。それ故に、むしろ敦煌本『慧淨疏』はその原型に近いもので、續藏經本『慧淨疏』は、祖本あるいは敦煌本の流傳の過程において増廣されていったものと考えべきではなかろうか」との見解を示したのである。

さらにこの論文において程氏は、俄（ロシア）藏敦煌文獻の中から、新たに本書の斷簡6種、すなわち『俄藏敦煌』第6冊より⑪⑫⑬の3種、『俄藏敦煌』第12冊より⑭の1種、『俄藏敦煌』第13冊より⑮⑯の2種、の計6種を發見したことを紹介している。程氏によれば、まず⑪⑫⑬の3種については、元來同じ寫本が分斷されたもので、薄い罫線のある紙に書寫されたものであるが、保存状態がかなり悪く、特に紙の下半部の損傷が著しいという。さらに本書の内容からすれば、これらの3種のもは2分することができる。すなわち、第1部分は、『心經』本文の「無眼界乃至無意識界」の注釋の「(前缺) 以破我者、若眼中有我…」から、「… 轉七識爲平等性智。八識不(後缺)」までの約13行であり、第2部分は、『心經』本文の「亦無無明盡、乃至無老死亦無老死盡」から、「菩提薩埵…」の直前の「總明三乘境觀俱空分。(後缺)」までの斷簡であるという。

次に⑭は、公開された1枚の寫眞に基づいていえば、地脚が缺損しているために、斷簡自體では1行あたり約16字しか残されていないが、幸いなことに、天頭が缺損してはいるものの、その損傷は本文の文字に達していないため、本書の内容との比定により、⑭は、本來1行に約30字で書寫されていたことが判った。本書の内容からすれば、『心經』本文の「無眼耳鼻舌身意、無色身香味触法、無眼界乃至無意識界」の注釋の「(前缺) 諸識無生滅、即名無願門。…」から、「… 故知、所緣六塵皆不實。故云、(無色聲香味触法)。若小乘之人、緣會則諸法生、緣(後缺)」までの約27行の斷簡であるという。

また⑮⑯の2種も、元來同じ寫本に屬するものである。その1枚のみの寫眞に基づいていうならば、現存の部分は、薄い罫線のある紙に1行約30字前後で約16行にわたって書寫されたものであるが、保存状態がかなり悪く、特に斷簡の後半部分の下半部の損傷が著しく、16行のうち、最後2、3行がわずかに10字弱しか残されていない。本書の内容からすれば、これらの2種のもは、『心經』本文の「無眼界乃至無意識界」の注釋の「(前缺) 受薰、即如來藏。淨轉八識。爲大圓鏡智。…」から、「無無明亦無無明盡、乃至無老死亦無老死盡」

の注釋の「…〈乃至無老死亦無老死盡〉者、即（後缺）」までの斷簡であるという。

さらに程氏は、先の論文の續編として、「智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究(2)」（『駒大佛教紀要』65,2007）と「智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究(3)」（『駒大佛教紀要』66,2008）と題する2篇の論文を連続して發表し、㊦をベースにしなが、新發見のロシア本によって従來難解だった箇所を校正した上で、本書の和譯と語注を試みている。

一方、當時中國社會科學院に所屬していた方廣錫氏が『般若心經譯注集成』（佛學名著叢刊）上海，上海古籍出版社，1994→2011）と題する専門書を編纂された。方氏は、前述の柳田氏が紹介した5種のテキストのほかにも、新たに⑤、②の2種を發見し、當時未公表だった②を除く⑥⑦④⑧①⑤の6種を用いて、新たに本書のテキストの校合をされた。

ところで、2000年に公刊された『方・英藏目録』によってスタイン本から新たに本書のテキスト③の1種が紹介された。すなわち方廣錫氏の著録によれば、③は41.4cm×12.7cmの34行の斷簡で、しかもペリオ本の⑤とは元來同一寫本の異なった部分であるが、兩者の間に缺漏があり、このままではつなぎ合わせることはできないという。ちなみに、前述の②については、『方・英藏目録』によれば、46.1cm×26.3cmの28行で1行約19字で書寫されているという。

そして、現在なお刊行中のシリーズ『北京敦煌』第105冊から新たに本書のテキスト⑨の1種が知られるようになったのである。その卷末に附された「條記目録」によれば、⑨はおよそ(19.5cm+15.7cm)×28cmからなる1紙の殘卷で、その正面に1行に21字で本書の内容19行が書寫されているという。⑨の内容は、具體的に本書の序の「無言。無言言者」より以降の部分と、「觀自在菩薩」の注疏の「即心如道、即道如心」より「行深般若波羅蜜多時」の注疏の「人法俱空、色心齊」までの2部分からなっている。

以上の如く本書のテキストは、そのすべてが敦煌文獻の中から發見されたものであり、しかもその数が16種にもものぼっているのは、本書がその成立當初から廣汎に流布していたことを如實に物語っている。

〔金剛經注釋書類〕

4、金剛般若經註（擬）

- ① S2511 ② P2216 ③ 敦研 096

〔テキストの翻刻・校定〕

伊吹敦「金剛藏菩薩撰『金剛般若經註』校訂テキスト」（『東洋學研究』40,2003,pp.101-136）

〔著書・論文〕

伊吹敦「北宗禪の新資料—金剛藏菩薩撰とされる『觀世音經讚』と『金剛般若經註』について—」（『禪文研紀要』17,1992,pp.183-212）

〔略記〕

本書は、次項で紹介する『觀音經註釋』（擬）と同様に、金剛藏菩薩と名乗る北宗の禪者によってなされた『金剛經』の注釋書で、神會が北宗禪の教えとして批判した「凝心入定、住心看淨、起心外照、攝心内證」によく合致する禪思想を有していることから、初期禪宗史における神會の果たした役割を、主に敦煌の禪籍によって再評價するに当たっては、缺かすことのできない貴重なものである。

最初に北宗禪の文獻としての本書を紹介し研究されたのが伊吹敦氏である。すなわち、伊吹氏が「北宗禪の新資料—金剛藏菩薩撰とされる『觀世音經讚』と『金剛般若經註』について—」（『禪文研紀要』17,1992）と題する論文を發表された。この論文において伊吹氏は、まず『敦煌遺書總目索引』では『金剛般若波羅蜜經注疏』（スタイン本①）、『金剛般若波羅蜜多經注』（ペリオ本②）とそれぞれ擬題を附された2種の文獻が、實は同じ内容を有するものであること、しかも本書は、天平勝寶4年（752）に入唐した膳臣大丘によって最初に日本に將來され、さらに『常暁和尚請來目録』（承和6年・839）にも「金剛般若經註一卷 金剛藏菩薩注」と著録されたものと同一のものであることを指摘された。また、主に北宗禪の資料である『大乘無生方便門』、『大乘五方便北宗』、智詵撰『般若心經疏』を對象として、本書と『觀音經註釋』との内容を比較することによって、上記諸文獻と類似する思想や表現のあることを明らかにしたうえで、金剛藏菩薩注とされる本書と『觀音經註釋』とを「初期の北宗の思想をそのまま繼承したと見ることができる」北宗文獻であると位置づけられた。そして、本書と『觀音經註釋』を含む金剛藏菩薩注の2種の文獻の成立時期については、「金剛藏菩薩注を、『大乘無生方便門』から『大乘五方便北宗』への展開、續藏本慧淨疏の智詵疏への展開の中途に置くべきだ」と指摘しつつ、「内容の類似性や著者名を同じくしている點から見て、兩文獻

は、同じ人物によって、或いは、思想傾向を同じくするグループ内で、時をおかずに、相次いで製作されたとみてよいから、これらの文獻の成立を、八世紀前半のかなり早い時期に置くことには問題がないであろう」と推定されたのである。

なお、本書のテキストの①と②については、伊吹氏の紹介によれば、「スタイン本は、その大部分を残しており、ペリオ本は、その一部に当たるが、スタイン本においても、巻頭と巻尾とは破損しており、その書名と著者とを知ることにはできないのである」という。

その後、伊吹氏が『甘肅敦煌』第1冊（1999）の影印から、敦煌研究院の所蔵する本書のテキスト③の1種を新たに発見し、これを底本とし、①と②を校本として本書のテキスト校訂を試みたのである。その研究成果として発表されたのが、「金剛藏菩薩撰『金剛般若經註』校訂テキスト」（『東洋學研究』40, 2003）と題する論文である。

この③については、『甘肅敦煌』第1冊の巻末に附された「敍録」によれば、「金剛般若經 金剛藏菩薩注」を首題とし、「金剛般若經」を尾題とする長さ15.5cm、幅11.5cmの罫入りの74葉からなる冊子本で、1頁に1行11～15字で6行が書寫されており、トータルで399行があるといい、『金剛經』の本文を朱で、注の内容を墨で色分けしており、巻末には明らかに本文と違う筆跡で西暦742年に当たる「大唐天寶元年五月 日白鶴觀御注」と記されているという。

〔觀音經注疏類〕

5、觀音經註釋（擬）〔觀音經金剛藏菩薩註、觀世音經讚、注觀世音經、註普門品〕

① BD3351（雨51、北6280）

〔著書・論文〕

伊吹敦「北宗禪の新資料—金剛藏菩薩撰とされる『觀世音經讚』と『金剛般若經註』について—」（『禪文研紀要』17, 1992, pp.183-212）

〔略記〕

本書は、金剛藏菩薩と名乗る北宗の禪者によってなされた『觀世音經』の註釋書で、日本の古記録では『觀世音經讚』、『注觀世音經』、『註普門品』などの名でも呼ばれているものの、敦煌文獻中よりその殘卷①が発見されるま

では、その中身についてはほとんど知られていなかった。

最初に敦煌文獻に本書が存在していることを発見されたのが伊吹敦氏である。すなわち、伊吹氏が「北宗禪の新資料—金剛藏菩薩撰とされる『觀世音經讀』と『金剛般若經註』について—」(『禪文研紀要』17, 1992)と題する論文を発表された。この論文において伊吹氏は、敦煌文獻の中より金剛藏菩薩と名乗るものが著したとされる『金剛般若經註』と本書を発見し、両者が極めて近い内容を有しており、しかもその共通性のある内容を他の北宗の諸文獻と比較した結果、いずれも北宗文獻であることを指摘された。さらに本書については、正倉院文書の中に、「觀世音經讀一卷 金剛藏菩薩注」という記載が4箇所ほどあり、別に『注觀世音經』とも呼ばれていることや、『東域傳燈目録』には「註普門品一卷金剛藏菩薩註」とされていることなどを明らかにされた。そして伊吹氏は、この両者を「金剛藏菩薩注」と呼び、これを『大乘無生方便門』から『大乘五方便北宗』への展開、續藏本慧淨疏の智詵疏への展開の中途に置くべきだと指摘された上で、本書の成立を、「天平八年以前に遡らせることができる」と推定された。さらに、本書が普寂に師事して北宗禪を學んだ道璿^{どうせん}によって、天平8年(736)に日本に請來されたと想定して、本書と『金剛般若經註』との「内容の類似性や著者名を同じくしている点から見て、兩文獻は、同じ人物によって、或いは、思想傾向を同じくするグループ内で、時をおかずに、相次いで製作されたとみてよいから、これらの文獻の成立を、八世紀前半のかなり早い時期に置くことには問題がないであろう」と推定されたのである。

なお、本書のテキストとしては、伊吹氏の紹介による①が知られている。すなわち、伊吹氏によれば、①は、「全體の略ぼ半分、すなわち、後半部分を残しているのであるが、末尾に「觀音經一卷 金剛藏菩薩註釋」なる尾題があることによって、これが金剛藏菩薩による『觀音經』の註釋書であることがわかる」という。なお、①は『北京敦煌』第49冊に收められており、その巻末に附された「條記目録」によれば、①は首缺の寫卷で、(3 + 135.5) × 28.5cmの4紙からなり、その表に書寫された本書は、1行凡そ28字で92行の内容があるという。

〔偽經論類〕

6、圓明論

- ① S6184 ② P3559 ③ P3664 ④ 服 06 ⑤ Jlx 696 (M1138) ⑥ 石井光雄舊藏本

⑦臺灣國立中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館所藏本 188106

〔テキストの翻刻・校訂〕

②③ John R. McRae: *The Northern School and the Formation of Early Ch'an Buddhism*, University of Hawaii Press, 1986, pp.018-044.

〔著書・論文〕

神田喜一郎「傳法寶紀の完帙に就て」（『積翠先生華甲壽紀念論纂』積翠先生華甲壽紀念會, 1942, pp.145-152）

「解題」（鈴木大拙編・古田紹欽校『敦煌出土積翠軒本絶觀論』弘文堂, 1945, pp.1-3）

柳田聖山「傳法寶紀とその作者—ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禪研究資料の札記, その 1—」（『禪學研究』53, 1963, pp.45-71）→〈柳田〉1（pp.188-223）

田中良昭「敦煌本「圓明論」について」（『印佛研』18-1, 1969, pp.204-207）→『田中敦煌』（pp.389-400）

岡部和雄「圓明論」（『敦煌佛典と禪』, pp.344-349）

John R. McRae: *Shen-hsiu and the Religious Philosophy of the Northern School, The Northern School and the Formation of Early Ch'an Buddhism*, University of Hawaii Press, 1986, pp.148-234.

鄭阿財「臺北中研院傅斯年圖書館藏敦煌卷子題記」（『吳其昱先生八帙華誕敦煌學特刊』1999）

柳田聖山「著者解題」（〈柳田〉1, pp.699-703）

程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について」（『禪學研究』83, 2005, pp.40-41）

山部能宜「北宗禪文獻にみられる唯識教義の影響」（『加地伸行博士古稀記念論集：中國學の十字路』研文出版, 2006, pp.571-591）

齋藤智寛「中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館藏「敦煌文獻」漢文部分敍録補」（『敦煌寫本研究年報』創刊號, 2007, pp.35-36）

〔略記〕

本書は、敦煌文獻にのみ存する長篇の北宗禪テキストの 1 種として知られているもので、その成立は 8 世紀前半とみられる一方、「馬鳴菩薩造」という語を有するテキストがあるものの、これが假託と考えられ、従ってその眞の

撰者や成立の思想的背景については、いまなお多くの謎が残されているものである。

本書をいち早く紹介されたのが陳垣氏の『敦煌劫餘録』(1931)である。すなわち、陳氏は本書のテキストとして北京本④を發見し、その詳細については「八紙、二三九行、全卷破損八十四行。卷首題曰圓明論馬鳴菩薩造。而文與起信論大同。背面爲四分律比丘戒本。首尾不完」と著録されている。陳氏の記載によって、④に馬鳴菩薩造とされる本書があり、その中身は『大乘起信論』とほぼ同じことが示された。

次いで本書のテキストとしてペリオ本の②と③の2種を紹介されたのが神田喜一郎氏である。すなわち、神田氏はパリでペリオが將來した未整理の敦煌文獻を調査した際、『傳法寶紀』の完本を含む②を發見し、その成果を「傳法寶紀の完帙に就て」(『積翠先生華甲壽紀念論纂』積翠先生華甲壽記念會,1942)と題する論文で發表された。その解説において、②と③に本書のテキストが含まれていることや『敦煌劫餘録』によって北京本にも本書の斷簡のあることなどを紹介されたのである。

さらに、鈴木大拙編・古田紹欽校『敦煌出土積翠軒本絶觀論』(弘文堂,1945)の「解題」によって、本書のテキスト⑥の存在が知られるにいたったのである。すなわち、石井光雄氏の所蔵になる敦煌本『入理縁門絶觀論』1種があり、その首部に本書の□□妄想品第八、辨明聲體品第九の2品があった。しかし、残念なことに、このテキストはすでに見ることができず、しかもそのフィルムすら大戦で焼失したという。

その後、柳田聖山氏が「傳法寶紀とその作者—ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禪研究資料の札記,その1—」(『禪學研究』53,1963)と題する論文を發表された。この論文において柳田氏は、ドゥミエヴィル氏のフィルム提供を受けて、複数の北宗禪の文獻が連寫されたペリオ本②に含まれる『傳法寶紀』に焦點を絞って論究されたが、それに連寫されているほかの北宗禪の諸文獻を紹介する際、②の首部に書寫された本書についても關説された。すなわち、本書については「内容は第九識、すなわち阿摩羅識に關するもので、如來藏縁起説の論書である」としつつ、これが馬鳴菩薩に假託されたものだとして推定して、馬鳴を本書の作者とする陳垣氏の假説に異議を唱えた上で、「とくに此の時代にその組織化を完成した菩薩戒思想の戒體説の根據となる自性清淨一心の當體として、極めて重要な意義を有するものである」と指摘されたのである。

一方、田中良昭氏が「敦煌本「圓明論」について」（『印佛研』18-1,1969 → 『田中敦煌』）と題する論文を發表した。田中氏は本書に關する従前の諸説を紹介し、新たにその存在が知られた本書のスタイン本①を加えて本書に關する諸本の内容を比較し検討したのである。その結果、これまでは「圓明論一卷」が②の「阿摩羅識、此云無垢清淨識也。即如來藏佛性之別名」以下の45行の内容の首題と見なされ、その直前にある九品にも及ぶ長篇の内容は本書と關係のない文獻と考えられてきたのが誤解で、九品失題とされてきた部分こそが本書の本文そのものであり、「圓明論一卷」というタイトルは、首題ではなく、尾題であることを明らかにし、當時知られた本書のすべてのテキスト①②③④⑥の5種の内容を以下の如く表記したのである。

P 三六六四	石井本	S 六一八四	北京本服六
圓明論（首題）		圓明論（首題）	圓明論一卷（首題）
第一一九の品名（目次）		第一一五の品名（目次） （以下缺）	馬鳴菩薩造 第一一九の品名（目次）
明心色因果品第一 要門方便品第二 （中途斷缺）			明心色因果品第一 要門方便品第二
P 三五五九			
辨明脩釋因果品第三 辨明三乘逆順觀品第四 簡易外道緣生根本品第五 入道邪正五門辨因果品第六 自心現量品第七 （第八品缺）	自心現量品第七 簡妄想品第八 （品題のみ）		辨明脩釋因果品第三 辨明三乘逆順觀品第四 （第五品缺） 入道邪正五門辨因果品第六 自心現量品第七 （首部二行のみ） （大乘起信論抄録）
辨明聲體品第九 圓明論一卷（尾題） 阿摩羅識 修心要論等	辨明聲體品第九 圓明論一卷（尾題） 阿摩羅識 絶觀論		第一因緣分 第二立義分 第三解積分 一、顯示正義 （二、三缺） 第四修行信心分 （以下缺）

田中良昭氏によって示された本書諸本の内容對照表（398～399頁）

ところで、岡部和雄氏が「圓明論」（『敦煌佛典と禪』）という章節で、本書の研究に関する従來の諸説を概観して、舊説を全面的に修正した前述の田中説を高く評価しつつ、本書には華嚴や法相唯識の用語がみられることを指摘されたのである。

その後、柳田聖山氏の薫陶を受けたアメリカ人の研究者ジョン・マクレー氏（John R. McRae）が、『北宗禪と初期禪宗の形成』（*The Northern School and the Formation of Early Ch'an Buddhism*, University of Hawaii Press, 1986）と題する學位請求論文において、「神秀と北宗の宗教哲學」（Shen-hsiu and the Religious Philosophy of the Northern School）という第7章を設けて、本書の思想について多岐にわたって論究された。すなわち、マクレー氏は、神秀と北宗の禪思想の展開との關係から、『觀心論』、本書、「五方便」の3種のテキストが検討に値するとした上で、本書は『觀心論』の内容を直接に導き出す基礎となっており、また東山法門の禪思想から北宗の「五方便」への展開を結びつけるものとして高く位置づけられたのである。さらに本書の成立については、神秀か普寂か或いは他の北宗の重要人物による講義から直接に筆録されたものと推定された。その上で、マクレー氏は、本書のペリオ本②③を用いてテキストを校訂され、これがいまなお本書の唯一の校訂本となっているのである。

ところで、前述の柳田氏の論文が後に〈柳田〉1に再録された際、その巻末に附された「著者解題」において、柳田氏は従來の本書の内容と誤解されていた「阿摩羅識云々」の一編を本書の要約として附録されたものとし、本書の位置づけについては、「圓明論」は「心王經」に比して、心意識の論義に傾く。よるところは『楞伽經』で、原始楞伽宗の要約のよう。言うならば、圓教の理を明らかにするのが目的。…（中略）…あえていえば、「心王經」は『續高僧傳』に先立ち、「圓明論」は『續高僧傳』を遡るまい。東山法門は『圓明論』を得て、楞伽宗の形成に傾くのではないかと指摘されたのである。

また、本書に関する最新の研究成果として、山部能宜氏の発表した「北宗禪文獻にみられる唯識教義の影響」（『加地伸行博士古稀記念論集：中國學の十字路』研文出版、2006）と題する論文がある。山部氏は、如來藏思想や法相唯識との思想的關連を指摘された本書に注目し、(a)『楞伽經』（4卷本）、(b)眞諦譯の唯識文獻、(c)玄奘譯の唯識文獻という3つの角度から、唯識文獻との關係を個別に検討し、玄奘譯が本書の最も主要な源泉であったことを指摘されたのである。

本書の各種テキストについては、前掲の田中氏による対照表に掲載された①②③④⑥の5種のほかに、⑤⑦の2種がある。まず、ロシア本の⑤は、田中氏が前述の田中論文を『田中敦煌』に再録した際に、目録によって知ったものとしてその存在に言及したL1138に当たるもので、やがて程正氏が発表した「俄藏敦煌文獻中に発見された禪籍について」（『禪學研究』83,2005）と題する論文においてその詳細が紹介されたのである。すなわち、程氏は『俄藏敦煌』第6冊に収載された⑤の寫眞と『俄藏敦煌漢文寫卷敍録』（上下巻、上海、上海古籍出版社、1999 漢譯。元は『ソ連アジア民族研究所藏敦煌漢文寫本注記目録』ソ連科學出版社東方文學部〈舊、東方文學出版社〉、1963、1967）の記述に基づいて⑤を紹介している。それによれば、⑤は75cm×27cmの首尾ともに缺く2紙からなる殘卷で、1行25-27字で54行の内容が残っており、本書の「要門方便品第二」の最後の一句、「亦非世界非非世界。作此觀時」から、「辨明修釋因果品第三」を経て、「辨明三乘逆順觀品第四」の途中の「種善根惠」までを存する斷簡であるという。さらに臺灣本の⑦は、鄭阿財氏の「台北中研院傅斯年圖書館藏敦煌卷子題記」（『吳其昱先生八秩華誕敦煌學特刊』1999）と題する論文や、齋藤智寛氏の「中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館藏「敦煌文獻」漢文部分敍録補」（『敦煌寫本研究年報』創刊號,2007）と題する論文などによって紹介されたものである。齋藤氏によれば、⑦はペリオ本や石井本に近い寫本であるものの、「阿摩羅識」の内容に續いて書寫される七言偈は⑦の独自の要素であり、「阿摩羅識」と同様に本書と密接な連關を持ちつつ流布していたもののようなのだという。

7、佛爲心王菩薩說頭陀經（心王經註）〔心王經、頭陀經〕

〔素本〕

- ① Sch353（ソグド語） ② 津藝 171（77・5・4510） ③ Д x 16997

〔注釋本〕

- ④ S2474 ⑤ P2052 ⑥ BD9746（在 67） ⑦ BD9779（坐 100）
⑧ BD15369（北新 1569） ⑨ 日本三井文庫本

〔テキストの翻刻・校訂〕

- ④ 『大正藏』85（1401c-1403b）

①⑤ 伊吹敦『『心王經』について—ソグド語譯された禪宗系偽經』（『駒大禪研年報』4,1993,pp.031-036）—伊

①③④伊吹敦「『心王經』の復元—漢文斷片とソグド語譯に基づいて」(『論叢 アジア文化と思想』2, 1993, pp.48-104)

①②④⑤⑧伊方廣鋁「佛爲心王菩薩說頭陀經(附註疏)」(『方・藏外』1, pp.253-318) — ㊦

[著書・論文]

H.Reichert: *Die soghdischen Handschriftenreste des Britischen Museums*, Heidelberg, I, 1928, pp.15-32. (ドイツ語譯)

E.Benveniste: *Journal Asiatique*, Paris, 1929, ii, pp.188-191.

矢吹慶輝「二〇 佛爲心王菩薩說投陀經」(『鳴沙餘韻解説』 pp.263-266)

E.Benveniste: 'Notes sur les textes sogdiens bouddhiques du British Museum', *Journal of the Royal Asiatic Society*, London, 1933, pp.33-44.

PDemiéville: 'Notes sur le fragment sogdien du Buddhadyānasamādhisāgarasūtra', Appendice I, *Journal Asiatique*, Paris, 1933, pp. 239-241.

陳寅恪「敦煌本心王頭陀經及法句經跋尾」(『歷史語言所集刊』8-1, 1939) → 『金明館叢稿二編』〈陳寅恪集〉3 (生活・讀書・新知三聯書店, 2001, pp.201-202)

D.N.MacKenzie: *The Buddhist Sogdian Texts of British Library*, Acta Iranica 10 Téhéran-Liège, 1976, pp.33-51, Notes, pp.40-48. (英譯)

伊吹敦「『心王經』について—ソグド語譯された禪宗系偽經」(『駒大禪研年報』4, 1993, pp.012-039)

沖本克己「MENSURA ZOILI—禪文獻の計量語彙論的研究の試み」(『禪文研紀要』19, 1993, pp.077-096)

伊吹敦「『心王經』の思想について」(『論叢 アジアの文化と思想』2, 1993, pp.1-31)

伊吹敦「『心王經』の復元—漢文斷片とソグド語譯に基づいて」(『論叢 アジア文化と思想』2, 1993, pp.048-0104)

伊吹敦「『心王經註』の成立について」(『印佛研』42-1, 1993, pp.285-288)

方廣鋁「[附] 關於『佛爲心王菩薩說頭陀經』」(『方・藏外』1, pp.318-328)

伊吹敦「再び『心王經』の成立を論ず」(『東洋學論叢』22, 1997, pp.82-106)

伊吹敦「集體書評 佛爲心王菩薩說頭陀經」(『禪文研紀要』23, 1997, pp.040-071)

柳田聖山「著者解題」(〈柳田〉1, pp.686-718)

椎名宏雄「六 『佛爲心王菩薩說頭陀經』 一卷」(柳田聖山、椎名宏雄編『禪學典籍叢刊』別卷解題、臨川書店 2001, pp.440-442)

伊吹敦「『心王經』の諸本について」(『印佛研』52-1, 2003, pp.180-187)

伊吹敦「『心王經』の思想と制作者の性格」（『日本敦煌學論叢』1,2006,pp.205-241）

曹凌「180 佛爲心王菩薩說頭陀經」（同氏『中國佛教疑偽經綜録』上海,上海古籍出版社,2011,pp.343-349）

〔略記〕

本書は東山法門の成立以前に出現したとされるもので、『大周刊定衆經目録』（695）の「偽經目録」に著録される一方、『修心要論』『達摩禪師論』『曹溪大師傳』をはじめとする多くの禪宗文獻に引用されていることから、初期禪宗の思想に影響を與えた、いわゆる禪宗系の偽經の1種とされるものである。ところが、禪宗が成立し隆盛を極めた後、本書は再び敦煌莫高窟より發見されるまでの長い間、他の多くの偽經と同様に、中國佛教の表舞臺からその姿を消していたのである。

また、後述する本書のテキスト紹介で觸れるように、嚴密に言えば、本書は『佛爲心王菩薩說頭陀經』（『心王經』）とこれに対する惠辯禪師による註釋書（『心王經註』）とに分けてみる必要があるが、この両者が極めて密接な関係にあることや、現存する諸本を見る限り、惠辯の註釋が未完のものであるとみられることなどから、本稿では、この兩者を含めて「本書」と稱しておくが、より正確な説明を期するためには、必要に応じて『心王經』、『心王經註』というような使い分けをすることを予めお断りしておきたい。

本書の漢文テキストの最初の紹介は、矢吹慶輝氏によってなされた。すなわち、矢吹氏は1930年に刊行した『鳴沙餘韻』に本書のテキストであるスタン本④の影印を収録し、さらにその2年後の1932年に刊行された『大正藏』卷85にそのテキストの校訂を収録されたのである。なお、④はその首題が「佛爲心王菩薩說投陀經卷上 五陰山室寺惠辨禪師註」とあるように、『心王經』のテキストの素本ではなく、惠辨（辯）禪師という人物によった本書の注釋を細字雙行の割り注という形式で書寫されたもので、しかも上卷の途中までしかなく、いわゆる尾缺の寫本である。

一方、本書にはソグド語譯テキスト①があることから、いち早く歐米の研究者の注目するところとなった。すなわち、1928年にドイツ人のH.ライヘルト氏が*Die soghdischen Handschriftenreste des Britischen Museums, Heidelberg, I*と題する論文を發表し、①によって本書のドイツ語譯を試みられたのである。ところが、このドイツ語譯にかなり問題があったようで、翌

年の1929年に、フランス人のE.バンヴェニスト氏が*Journal Asiatique*に論文を發表しこれを批判した。さらに、E.バンヴェニスト氏は1933年に、‘Notes sur les textes sogdiens bouddhiques du British Museum’, *Journal of the Royal Asiatic Society*, London, 1933と題する論文を發表し、その中でライヘルト氏による本書のソグド語テキスト原文に注釋を付けるという形式をとり、自身の研究成果を公表してそのテキストにあった問題點の修正を試みた。ただ、①は首尾ともに缺いているために、この段階ではそこに書寫されている經典の名稱を確定するにはいたらなかった。

そこで、言語の種類は違うものの、矢吹氏が發見した④の失われた部分が實はこの①であると同定したのがドゥミエヴィル氏である。すなわちドゥミエヴィル氏は前述のバンヴェニスト氏の論文に、‘Notes sur le fragment sogdien du Buddhadyānasamādhisāgarasūtra’, *Journal Asiatique*, Paris, 1933と題するものを附し、そこで、①と④の両者に重なる部分がないにもかかわらず、そのいずれにも内容面では教義への附會という共通する傾向があること、そして、①のソグド語譯の本文は、この經典が「大乘の頭陀經」であることを示唆し、これが④の漢文テキストの題名とよく一致すること、という2つの根拠を擧げて、両者がもともと同一のテキストであると同定されたのである。

こうしたドゥミエヴィル氏による先見性に富んだ示唆が早い段階でなされたにもかかわらず、その後約60年の間、僅かにD.N. マッケンジー氏が1976年に本書の英譯を試みた *The Buddhist Sogdian Texts of British Library*, Acta Iranica 10 Téhéran-Liège, 1976と題する論文を發表した以外には、本書に關する研究はなぜか長い間放置されたままであった。こうした停滞感を一掃するきっかけとなったのが、1993年に發表された伊吹敦氏の『『心王經』について—ソグド語譯された禪宗系偽經』(『駒大禪研年報』4, 1993)と題する論文である。

すなわち伊吹氏は、新たに本書のペリオ本のテキスト⑤を發見し、前述の①と④がもともと同一の文獻の異なる言語の寫本であることを明らかにしたドゥミエヴィル氏が提示した2つの根拠に、さらに④にある惠辯禪師の注に存する「有照大士」という人物名がソグド語の寫本①にある「有照菩薩」と同一人物であること、本書の内容の一部が敦煌禪宗文獻の『導凡趣聖心決』と正しく一致すること、という2つの根拠を新たに加えて、このソグド語譯の①、漢文テキストの④⑤の3種が同一の經典の寫本であること、そして本

書が初期禪宗史における極めて重要な位置を占めるものであることを指摘された。その上で伊吹氏は、天台宗の荆溪湛然の『止観輔行傳弘決』と『曹溪大師傳』における本書の引用、『大周刊定衆經目録』（695）の本書に関する著録などを手がかりにして検証した結果、本書の成立を道宣の『大唐内典録』（664）から『大周刊定衆經目録』（695）までの30年間に絞り、更に①④⑤の3種による本書の漢文テキストの復元を試みたのである。ちなみに、新たに紹介されたペリオ本⑤は、内容的には④と一致しており、首題や摺筆の場所も同じであるが、ただ④は細字雙行の割り注という形式を取っているのに對し、⑤は『心王經』の本文も惠辯禪師の注も共に同じ大きさで書寫されている。

その後も伊吹氏は本書に關する重要な論考を次々と發表されたのである。まず『『心王經』の思想について』（『論叢 アジアの文化と思想』2,1993）と題する論文では、前述の漢文復元テキストを34の段落に區切って逐一それぞれの内容を要約した上で、本書の基本思想、特性、位置づけなどについて検討し、「七世紀末に、『法王經』などと共に、東山法門において製作された『心王經』は、後に、初期禪宗の中でかなり重要な位置を占めることになる、經典の獨自な理解の萌芽ともいべきものを含み、その後代に與えた影響には、極めて重大なものがある。その後、その思想傾向は、その註釋書たる、『心王經註』に受け繼がれ、更に、いっそう發展させられて、やがて、八世紀前半において、金剛藏菩薩註が成立することになるのである」と締めくくられた。

實は、同じこの『論叢 アジア文化と思想』2に、本書に關するもう1篇の伊吹氏の「『心王經』の復元—漢文斷片とソグド語譯に基づいて」（1993）と題する論文も收められている。前述の通り伊吹氏は、すでに①④⑤の3種を用いた本書の漢文テキストの復元を試みたが、本書の禪宗史における重要性に鑑み、復元したテキストの信用性を測る材料を提供すると共に、個々の問題に對する諸賢の批判を仰ぎたいとして、漢文テキストに復元した際の根據となった本書のソグド語譯をいかに漢文テキストに復元したのか、その基準を公表したのである。

さらに、伊吹氏は『『心王經註』の成立について』（『印佛研』42-1,1993）と題する論文を發表し、この中で、『心王經』そのものではなく、その「惠辯禪師」によった註の部分に注目され、「經文の特異な解釋」、「觀法」、「思想」の3つの角度から、具體例を挙げながら検討した結果、『心王經註』は「多くの點で北宗文獻と共通するが、特に、註釋書ということもあって、金剛藏菩薩註の『金剛般若經註』、『觀世音經讚』と、多くの一致點を見ることができると指摘し、

『心王經註』も、この兩者とまさに同一の思想的流れの中で成立したものとみることができる、とされている。

ところで、當時、中國社會科學研究院に所屬していた方廣錫氏が、北京圖書館（現、中國國家圖書館）の所蔵の中から⑧、天津藝術博物館の所蔵の中から②の都合2種の本書のテキストを新たに発見した。驚くことに、この2種はいずれも漢文文獻で、しかも完本であるという。前述の伊吹氏による一連のすぐれた研究に刺激を受けた方氏は、⑧を底本として、①②④⑤に新たにその存在が知られた⑨を加えた5種を校本として、本書の漢文テキストの校合を試みられた。その成果は、『佛爲心王菩薩說頭陀經』と題して、『方・藏外』1に収録された。ここにいたって、本書の漢文テキストがようやく完全なたちで學界に紹介されたのである。これに合わせて方氏は、そのテキスト校訂の後に「[附] 關於『佛爲心王菩薩說頭陀經』」と題する附録をつけ、本書に關する研究史を回顧しつつ、特に本書の成立を初期禪宗教團と結びつけようとする伊吹説に異議を唱える一方、各種のテキストを紹介した上で、これらを3つの系統に分類するなど、独自の見解を示された。すなわち、方氏によれば、當時発見された本書のテキスト①②④⑤⑧⑨の6種を甲乙丙の3系統に分類することができるという。それを圖式で示せば以下の通りである。

- | | |
|---|----------------------------|
| { | 甲系統：②（素本）、⑧（註疏本）、⑨（註疏本）の3種 |
| | 乙系統：④（註疏本）、⑤（註疏本）の2種 |
| | 丙系統：①（ソグド語、素本）の1種 |

この方氏の研究成果の公表によって自説の一部の修正を迫られた伊吹氏は、1997年3月に「再び『心王經』の成立を論ず」（『東洋學論叢』22）、その同年6月に「集體書評 佛爲心王菩薩說頭陀經」（『禪文研紀要』23）と題する論文をそれぞれ發表された。前者においては、本書を引用したものとして、新たに三論宗の慧均（生歿年未詳）著『大乘四論玄義』を見出し、その成立が7世紀初頭とみられることから、本書の成立も東山法門の影響下ではなく、東山法門の活動以前に遡り、7世紀初頭をその下限だとして自説を改められた。また後者においては、方氏のなしたテキスト校訂は本書の研究に極めて有意義なものであったとしつつも、校訂の際にあった問題点を指摘した上で、原寫本と對照し、方氏の校訂本ならびに校記に關する不備の點をすべて列舉したものに「原寫本との校合」という見出しをつけて書評の最後に附録された。

ところで、伊吹氏や方氏の研究成果を知った柳田聖山氏が、1999年に刊

行された〈柳田〉1の末尾に附された「著者解題」において、本書は『梵網經』を踏まえて觀心釋としてつくられたもので、『續高僧傳』にも先立つ一方、P3559に連寫されている北宗文獻の1種である『圓明論』は『續高僧傳』を遡らないが、東山法門はこの『圓明論』を得て楞伽宗の形成に傾いたと指摘されるなど、原始東山法門の素顔を窺うことのできる資料として、多岐にわたって本書を論じられた。

一方、2001年に柳田聖山、椎名宏雄の兩氏の共編になるシリーズ『禪學典籍叢刊』の「別卷」が臨川書店より刊行された。この中で、『津藝敦煌』第3冊にある本書のテキスト②（完本）の影印が、椎名氏による「六『佛爲心王菩薩說頭陀經』一卷」と題した解題と共に収録された。椎名氏の「解題」は、本書に関するそれまでの研究成果を網羅し、簡にして要を得たものである。

その後、本書に関する伊吹氏の研究はなお繼續された。すなわち、「『心王經』の諸本について」（『印佛研』52-1,2003）と、「『心王經』の思想と制作者の性格」（『日本敦煌學論叢』1,2006）と題する2種の論文を發表し、前者においては、本書の諸本と諸文獻にみられる引用とに基づいて本書のテキストの變遷を辿って検討した結果を、次の諸點にまとめて以下のように明らかにされた。すなわち、

1. 附註本の中では、三井文庫本が最も古い形態を伝え、北京圖書館本新一五六九號がこれに繼ぎ、スタイン二四七四號やペリオ二〇五二號のテキストは比較的新しい。
2. 附註本が註釋の對象とした『心王經』のテキストは、經文のみの天津藝術博物館本やソグド語譯と比較すると本文に展開が見られるため、惠辯の註釋が著されたのは、『心王經』の流布の歴史の中でも、比較的後期に屬すると考えられる。
3. 7世紀中葉の『文選注』の引用が天津藝術博物館本に非常に近いことから判斷して、『心王經』の成立は『大乘四論玄義』の成立を少し遡る6世紀末頃、ソグド語譯の時期は8世紀前半、附註本の成立は8世紀の前半から中葉あたりと考えることができる。

また、後者においては、本書の内容をA～Pまでの19の部分に分けて検討した結果を以下のようにまとめられた。

まず、その思想については、

1. 「悟り」の實現可能なことを主張し、その根據を如來藏思想に求める。
2. 禪觀を中心とする自らの修行法を「頭陀」と呼び、「悟り」に至る方

法として位置づける。

- 3、「頭陀」を教える者としての「善知識」の重要性を強調する。
 などの骨子から成るものである」と指摘した。

また、本書に特徴的な性格としては、次のような諸点を挙げている。

- 「1、厳しい現実認識と眞摯な態度
 2、内觀的性格の強烈さ
 3、衆生濟度に對する消極性
 4、老莊思想的な用語の使用」

さらに、本書の制作者の性格については、次のように推定されている。

- 「1、禪觀を中心とする独自の修行法を眞摯な態度で實踐していた。
 2、比較的少數の修行者グループ内での活動が中心で、一般社會との接點を缺き、講壇佛教を嫌い、教學研究を重視しない傾向を有していた。
 3、自らの思想の基盤を頭陀行の傳統の中に求めていたが、山林を離れて都市に進出したためか、「頭陀」を理念化しようとする傾向をも有していた。」

一方、『俄藏敦煌』にも本書のテキスト③が存在していることが、曹凌氏の「180 佛爲心王菩薩說頭陀經」（同氏『中國佛教疑偽經綜録』上海，上海古籍出版社，2011）と題する解題によって紹介されたのである。筆者が『俄藏敦煌』に納められたその寫眞を手がかりに、方廣錕氏の校訂したテキストと比定したところ、③は方本の「塵垢。衆生不受、當如之何？ …」（ZW1-302a8）から「内外清淨、無有相」（303a6）の内容に相當する斷簡であることが判明したのである。

また、本書のテキストで北京本⑥⑦の2種については、『北京敦煌』第160冊の「題目條記」では、これらの2種をペリオ本⑤をベースにして連寫されたものとして『佛爲心王菩薩說頭陀經續』（擬）という擬題をつけられたのである。これに對して曹氏は、その内容を見る限りでは、連寫された内容が本書と無關係であると指摘し、⑥⑦の2種を本書のテキストから除外されている。

以上の如く本書は、その發見當初は、ヨーロッパの學者によって研究されてきたが、1990年代以降は、専ら日本の伊吹敦氏による研究が續けられ、さらに中國の方廣錕氏によるテキストの校訂や研究、および日本の柳田聖山、椎名宏雄の兩氏による影印とそれぞれの解題によって廣く知られるにいたつたものである。

8、佛說法王經

〈漢文文獻 (敦煌)〉

- ① S2692 ② S7269 ③ BD630 (日 30, 北 8278) ④ BD6326 (鹹 26, 北 8279)
 ⑤ BD6536 (淡 36, 北 8662) ⑥ BD10938 (L1067) ⑦ BD14700 (北新 900)
 ⑧ BD15098 (北新 1298) ⑨ ㄐ x 3968 或 ㄐ x 3989 ⑩ ㄐ x 5080 ⑪ ㄐ x 5387
 ⑫ ㄐ x 5513 ⑬ ㄐ x 6080 ⑭ ㄐ x 6140 ⑮ ㄐ x 6546 ⑯ ㄐ x 9438

〈チベット語文獻 (敦煌)〉

- ⑰ S222 ⑱ S223 ⑲ S264 ⑳ S265 ㉑ S267 ㉒ P624 ㉓ P2105V

〈ソグド語文獻 (敦煌)〉

- ㉔ P.sogdien23 ㉕ O2326 ㉖ O2922 ㉗ O2437

〈チベット語文獻 (西藏大藏經本)〉

- ㉘北京版 ㉙デルゲ版

〔テキストの翻刻・校訂〕

- ①『大正藏』85 (1384c-1390a)
 ㉓㉔㉕沖本克己「禪宗史に於ける偽經—「法王經」について」(『禪文研紀要』10, 1978, p.35) (首缺だった漢文テキストを補完するために、首部のみのテキスト校訂である)
 ㉖㉗㉘吉田豊「大谷探險隊将来中世イラン語文書管見」(『オリエント』28-2, 1985, pp.50-54)
 ①③④⑤⑦⑧沖本克己「『法王經』」(『禪思想形成史の研究』〈花園大學國際禪研究所研究報告〉5, 1998, pp.304-330) —㉚
 ⑩⑪⑫程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について(二)」(『駒大佛教論集』39, 2008, pp.391-395)
 ㉘北京版西藏大藏經 No.909, vol.136, pp.136-142.
 ㉙デルゲ版西藏大藏經 No.243, vol.66, Za 1b-15b.

〔著書・論文〕

- 矢吹慶輝「一八 佛說法王經」『鳴沙餘韻解説』(pp.254-258)
 小畠宏允「チベットの禪宗と藏譯偽經について」(『印佛研』23-2, 1975, pp.170-171)
 沖本克己「禪宗史に於ける偽經—「法王經」について」(『禪文研紀要』10, 1978, pp.27-61) →同氏『禪思想形成史の研究』〈花園大學國際禪研究所研究

報告〉5 (1998, pp.278-330)

岡部和雄「『法王經』」(『敦煌佛典と禪』, pp.362-365)

吉田豊「大谷探險隊将来中世イラン語文書管見」(『オリエント』28-2, 1985, pp.50-65)

吉田豊「ソグド語佛典解説」(『内陸アジア言語の研究』Ⅶ, 1991, p.111)

沖本克己「MENSURA ZOILI—禪文獻の計量語彙論的研究の試み」(『禪文研紀要』19, 1993, pp.077-096)

百濟康義等編『イラン語断片集成・解説編』(龍谷大學善本叢書) 17, 1997, pp.72-73)

猪崎直道「偽經『法王經』とその思想について」(『宗教研究』323(73-4), 2000, pp.234-235)

『方・英藏目録』(p.85)

勝義「『俄藏敦煌文獻』第十二册校讀記(上)」(『戒幢佛學』2, 2002, p.603, p.644)

榮新江「唐代禪宗の西域流傳」(『田中良昭博士古稀記念論文集 禪學研究の諸相』大東出版社, 2003, pp.059-068)

勝義「『俄藏敦煌文獻』第十二册校讀記(下)」(『戒幢佛學』3, 2005, p.462)

程正「俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について(二)」(『駒大佛敎論集』39, 2008, pp.391-395)

曹凌「175 法王經」(同氏『中國佛敎疑偽經綜録』上海, 上海古籍出版社, 2011, pp.333-337)

〔略記〕

本書は、7世紀後半に中國で成立し、初期禪宗に思想的影響を與えていた、いわゆる禪宗系の偽經の1種として知られるものである。

最初に本書を發見し紹介したのが矢吹慶輝氏である。すなわち、矢吹氏は本書のテキストであるスタイン本①を發見し、それを『大正藏』卷85に収録すると共に、『鳴沙餘韻解説』で本書を紹介し、その成立を道宣の『大唐内典録』が成立した龍朔4年(664)以前とし、さらに本書には廣本と略本の2つのバージョンがあったことをも想定された。

こうした矢吹氏の假説に異議を唱えたのが沖本克己氏である。すなわち、沖本氏は、「禪宗史における偽經—『法王經』について—」(『禪文研紀要』10, 1978)と題する論文を發表し、その中で本書のテキストを後述する3通りに分けて紹介した上で、本書の成立時期については、經録、引用文獻、内容

語句の3つの角度から検討を加えた結果、本書が『大周刊定衆經目録』（695）の「偽經目録」に初めて見出されることから、その出現を664年以前ではなく、664年から695年までの間と推定されたのである。また、本書の思想を検討するに当たっては、本書が基づく經典として『涅槃經』と『維摩經』を挙げ、前者については、本書がその構成を借り、その思想の多くを繼承していると、後者については、本書がそれに負うところが大きい。ただ、一乗方便の立場を取る『維摩經』に對して、本書は一乗思想に基づく方便否定説を唱えるものである、と指摘されている。さらに本書の思想史的意義については、本書がまた『大乘起信論』を起點として『金剛三昧經』『法句經』『禪門經』『圓覺經』に至る禪宗系偽經の独自の潮流を形成していることは確かであるとした上で、本書を引用した典籍として『百丈廣語』『白氏文集』（白居易の文集）『宗鏡錄』『禪定燈明論』などを挙げ、「中國本土ではさほど重視されなかった如く見えるこの經も、しかしながら決して捨て去られた譯ではなく、却って方便を否定する數少ない經典として依用され續けたのであり、このことは『法王經』の多様な思想内容と獨自性を示すと共に、高度な實踐思想を展開する禪宗が、一方に於いてこうした典籍群を保存し續けていたことをも意味するであろう」と結ばれている。

なお、先に觸れた沖本氏による本書のテキストの3通りを圖に示せば以下の通りである。

{	敦煌出土漢文『法王經』	{	①：『鳴沙餘韻解説』參照
			③：首缺、T85-1384c～1390a。 (①とほとんど重複)
			④：首缺、T85-1384c～1390a。
			⑤：首尾缺、T85-1385b～1389b。
	敦煌出土西藏文『法王經』：⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓の都合7種		
西藏大藏經入藏本『正法王大乘經』：㉘、㉙の2種			

この沖本氏の上記論文は、やがて同氏の『禪思想形成史の研究』（花園大學國際禪研究所研究報告）5（1998）に加筆して再録された。その再録に際し、本書の漢文テキストについては、従來の①、③、④、⑤の4種に加えて、新たに⑦、⑧の2種を紹介された。すなわち、⑦については、「一紙を貼り付けて表題が付けられているが、あとから貼り合わせた如くで、次の紙の法王經

序分にあたる部分の冒頭五十五文字、おそらく二行分が脱落している」という。また⑧については、本書漢文テキストでは唯一の完本であるが、他の諸本と比べて文字の出入がみられ、「見せ消ち」という手法で元の字に軽く朱点を打ち、横に訂正すべき字を朱で書き込む校訂が施され、その用紙は縦25cm、横50cmで、罫入りの紙17枚に1紙28行、1行16字から17字が書寫されており、表題部分と末尾には短い紙が貼り付けてあって、都合19枚を貼り合わせた卷子本であるという。さらに、①を底本とし、③④⑤⑧を校本として新たに本書のテキスト校訂を試みたのである。

また、沖本氏は「MENSURA ZOILI—禪文獻の計量語彙論的研究の試み」（『禪文研紀要』19,1993）と題する論文を發表し、本書を含む禪宗系偽經を主な対象に語彙の定量的研究という獨特の手法を用いて考察されたのである。すなわち、沖本氏は、禪宗系偽經として『法王經』、『金剛三昧經』、『禪門經』、『梵網經』、『法句經』、『佛頂經』、『圓覺經』の7種に、禪宗偽經の成立にも深く關與していると思われる眞諦譯『起信論』、求那跋陀羅譯『楞伽經』の2種を加えて資料とし、比較の爲に玄奘譯『俱舍論』と小乗『涅槃經』を用いつつ、これらのテキストの相關關係を計量的に見通す何らかの方法を模索し、さらにそれを一般論化することの可能性を確かめられたのである。本書に關わる結論として、沖本氏は以下の4點を指摘されている。

「『起信論』は他のテキストとの共通性が高く、その普遍的性格を示すごとくであるが、『法王經』と『法句經』に對しては語彙の相違が大きい。この傾向は『楞伽經』『佛頂經』などにも見られ、『法王經』と『法句經』が特異なポジションにあることを豫想される。」

「『楞伽經』はほぼ完璧に『金剛三昧經』、『法王經』、『法句經』を包含しているといってよい。」

「『金剛三昧經』は『起信論』に似た數値を示すが、『法王經』に近縁性を示す點が異なる。」

「『法王經』は『金剛三昧經』に似た數値を示す。また兩者の異なり度は低いから、形態的には相似性が高い。」

その後、俄藏敦煌にも本書の斷片が含まれていることが、勝義氏の論文によって明らかにされた。すなわち、勝義氏が立て續けに「『俄藏敦煌文獻』第十二册校讀記（上）」（『戒幢佛學』2,2002）と、「『俄藏敦煌文獻』第十二册校讀記（下）」（『戒幢佛學』3,2005）と題する2種の論文を發表し、前者においては本書のテキスト⑩、⑪の2種を、後者においては⑫の1種をそれぞれ目

録のかたちで紹介されたのである。

こうした勝義氏の研究成果を踏まえつつ、ロシア所蔵の諸本の中身を、新たに見出されたスタイン本②とあわせて紹介したのが、程正氏の「俄藏敦煌文獻中に発見された禪籍について(二)」(『駒大佛教論集』39,2008)と題する論文である。すなわち程氏は、『方・英藏目録』の記述を手がかりにして本書の斷片である②を紹介した上で、勝義氏が言及されたロシア本の⑩、⑪、⑫の3種の本文内容を、㊦の對應する部分と上下2段で比較して示したのである。まず②については、2紙からなる55.5cm×20cmの斷片で33行の内容が残されおり、T85-1388a9～1388b12の部分に相當し、⑩については、1行3～15字で書かれてはいるが、テキストの原文からすれば、もともと1行に17字で書寫されていたことが推定できるとする。さらに⑪については、地脚を含む下半部が破損しているものの、天頭部分がかろうじて残されており、㊦と比較すれば、もともと1行に19字前後で書寫されていることが比定できるとし、その内容は本書の冒頭部分にあたり、T85-1384c5～c18に相當するといひ、⑫については、天地ともに缺けたもので、その内容は本書の末尾にあたり、T85-1389c9～1390a10に相當するものであるという。

さらに、曹凌氏がまとめた「175法王經」(同氏『中國佛教疑偽經綜録』上海、上海古籍出版社、2011)と題する項目によれば、前述の⑧⑨⑩の3種のほかにロシア藏敦煌文書には、まだ⑨(Ⅱx 3968或Ⅱx 3989)、⑬、⑭、⑮、⑯にⅡx 7105の計7種があるというが、筆者が『俄藏敦煌』で確認したところ、⑨のⅡx 3968とⅡx 3989は、一枚の寫眞に撮影されており、そのうちの右側にある1種のみが本書の一部であるが、2つある番號のうちどれがそれに該當するかは分からず、⑨(Ⅱx 3968或Ⅱx 3989)という規定外の表記で示すほかに方法がない。また斷片であるⅡx 7105も恐らく本書のテキストではないと思われる。従って曹氏が紹介されたロシア本7種のうち、明らかに本書のテキストとして認定できるのは、⑨、⑬、⑭、⑮、⑯の計5種であるということになる。

一方、曹氏が本書の漢文テキストとして新たに北京本⑥の1種を紹介された。筆者がその寫眞を収めた『北京敦煌』第108冊で確認したところ、⑥は36cm×25.8cmの1紙からなる卷子本の殘卷で、1行17字で約20行が残っており、その内容は大正藏T85-1386a25～1386b15に相當するものである。また、曹氏は状況未詳としながら、本書のテキストリストにスタイン本のS8438、S9791、S9896、S12368、S14083、S14084の6種を加えられたが、いずれも未

公表のものばかりで未確認のために、敢えて○番号をつけず、その情報のみをここに記しておく。

ところで、本書のテキストは、漢文とチベット語譯のもの以外にソグド語譯も存在したことが、吉田豊氏の研究によって明らかになった。すなわち吉田氏は、「大谷探險隊將來中世イラン語文書管見」（『オリエント』28-2,1985）と題する論文において、大谷文書の②⑤②⑥②⑦の3種が本来同一の寫本の斷片であることを指摘し、それらを結合して13行の内容を復元されたのである。その後吉田氏は、「ソグド語佛典解説」（『内陸アジア言語の研究』Ⅶ,1991）と題する論文を發表し、その中で、ペリオ本の②④も本書のソグド語譯であることを比定された。この吉田氏の本書に関する研究成果は、やがて榮新江氏の「唐代禪宗の西域流傳」（『田中良昭博士古稀記念論文集 禪學研究の諸相』大東出版社,2003）と題する論文によって紹介されたのである。

本稿は、駒澤大學平成24年度特別研究助成「禪宗文獻の成立と受容の研究」（共同研究、代表、奥野光賢）による成果の一部である。